
鬼 2 題

朋次郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼 2 題

【Nコード】

N99290

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

おにさんこちらてのなるほうへ

その1 こつち山の鬼さん

「こつち山」というところがあります。

そこには昔から鬼さんが1人で住んでいました。

この鬼さんは怖い顔をしています。性格はおとなしく、よい鬼でした。昔話に出てくるような、人間を食べたり怖がらせたりする鬼ではありませんでした。

それでも鬼さんは人間の目にふれないようにひっそりと暮らしていました。100年ほど前におくさんが死んでしまっただけからさびしくてなりません。

「ひとりでご飯を食べてもおいしくないよ。ひとりで散歩していてもおもしろくないよ」

山のとっぺんまでいくと、友達のかみなり鬼さんが時々話し相手になってくれます。

「ひとりではさみしかろう、雲の家でいっしょにくらそうよ」

かみなり鬼さんはそういつてさそってくれますが、こつち山の鬼さんは首をふります。

「いやいや、こつち山での思い出がたくさんある。だから、どんなにさみしくともここをはなれられないよ」

ある時、こつち山の鬼さんは冬に備えて木の実をたくさん集めていました。夢中で取っていたせいか普段近付かないふもと近くまでおりてきてしまいました。

岩かげからそっと目をのぞかせています。いつのまにか人間の家がたくさん建っています。ふもとぎりぎりまでぎっちりと建っている。鬼さんは目を丸くしました。

「おどろいたぞ、こつち山には鬼がいるといわれて、人間はわしをおそれ決して近寄らなかったものじゃが、こんなに近くにまで暮らしてくれるようになったのか」

そしてもう人間は自分をこわがらなくなったのかもしれないと考えました。そうしたらひとりぼっちの自分にもたくさんの人間の友達ができるかもしれません。そう考えていると、ふもとからかわいらしい声がしました。

「鬼さん、こちら、」

「鬼さん、こちら、」

こどもの声でした。それも何人もいます。鬼さんはびっくりです。

「鬼さん、こちら、」

声のする方をそつとのぞいてみました。

小さなこどもたちが鬼ごっこで遊んでいました。

「鬼さん、こちら、手の鳴るほうへ！」

鬼の役のこどもがハンカチで目をおおっています。目隠ししたまま手を鳴らせている子をつかまえようと一生懸命でした。

「なあんだ、鬼ごっこか、私を呼んでくれるなんて話がうまいと思っただよ」

それでも鬼さんはにこにこ顔です。

鬼ごっこで遊んでいたこどもたちがすごくかわいかったからです。実は鬼さんはこどもが大好きなのです。最後に人間のこどもを見たのはもう200年ほど前でした。もちろんそのこどもは鬼さんを見るなり怖がって逃げてしまいましたが。

だから、鬼さんはこどもを怖がらせないように木陰に立ってそつと見守っていました。久しぶりに見たこどもたちは着ている服の感じこそ違いましたが、楽しそうな笑顔や笑い声は何百年たっても変わらないと思いました。

「あれ、おじさんは鬼さん？」

小さなあどけない声がすぐうしろでしました。いつのまにかこどもがひとり、うしろにきていたのです。

他のこどもたちも鬼さんを見つけて集まってきました。

「わあ、このツノはほんもののなの？」

「わあ、鬼の目玉って大きいなあ！」

「わあ、木の実がたくさんある。これ、食べられるの？」

鬼さんはこどもたちに囲まれてうれしくなりました。地面にすわってツノや目玉を自由にさわらせてやりました。こどもたちも大喜びです。

それから鬼ごっこをしました。

もちろん、鬼さんがずっと鬼の役です。

「鬼さん、こちら、」

「鬼さん、こちら、」

「手の鳴る方へ！」

楽しい鬼ごっこがどのくらい続いたのでしょうか。

夕日が落ちてくるとこどもたちの親が迎えにきて、ひとり、ふたりと帰っていきました。迎えにきた親達も鬼さんを怖がりません。

気持ち悪そうにじろじろ見て、子供の手をひいて帰っていきました。

「さようなら、鬼さん、また遊ぼうね！」

こどもがそう言う、親はこどもをしかります。

「浮浪者に口をきいてはいけません」

「鬼のお面をつけて、こどもの気を引いて気持ちが悪い人だこと」

おとなは鬼さんを見てもだれも本物とは思わないのでした。

鬼さんも「浮浪者」という意味はわかりませんでした。誰もが自分を怖がらなくなったので時代が変わったんだ、と思いました。それはうれしいことなのか、よくわかりませんでした。

ただ、これからは時々ふもと近くまで下りてきたらこどもたちと一緒に遊べるなあ、と考えました。

次の日も鬼さんはこどもたちと遊ぼうとふもと近くの公園までおりました。こどもたちの喜びそうな木のおもちやも作ってきました。

「あつ、きのうの鬼さんだ」

さっそく目ざとく見つけられて鬼さんはうれしくなりました。

「そうじゃ、わしじゃ。さあ、みんな、わしと楽しく遊ぼうな」

そういうなり厳しい声がありました。

「その人と遊んではいけません！」

鬼さんが振り向くと何人かの大人がこつちをにらんでいます。

「あんた、よそへ行つてくれ。環境が悪くなる」

鬼さんは困りました。

「いや、遊ぶだけです」

大人の人間は鬼さんを軽蔑したような顔で言いました。

「鬼の恰好で、鬼ごっこか。いい大人のくせにバカなやつだな」

「いんや、わしは本物の鬼ですよ」

「うそおつしやい、お面を取りなさい」

ひとりが近づいて鬼さんの顔にさわりました。

「うわっ」

その人はちよつとさわつただけで手をひっこめました。こどもたちはおかしそうに見ていました。鬼さんもおかしくなつてわはは、と笑いました。

その人は怒つた顔で言いました。

「お面に継ぎ目がない。よくできていることだ。でも、この世に鬼なんかいませんからね。こどもたちを惑わすようなことはしないでください」

「わしは悪いことはしない鬼だから、そんなことはしないよ」

大人達は鬼さんを指さして、ちよつと頭がおかしいのだ、と言ひ合いました。鬼さんは自分を怖がらなくなった人間をからかつてやろうとしました。

「じゃあ、わしが本物の鬼だということを教えてやりましょう」

大人達も言い返しました。

「それじゃあ、やってもらいましょうかね」

その瞬間です。鬼さんは持つてきたこどものおもちゃを空中に浮かべました。

「どうですか、人間にはできないでしょう」

こどもたちは喜んで拍手をしました。大人達も手品がお上手ですねと軽蔑しながらほめました。

「いんや、手品なんかじゃない、それならこれはどうかいな」

鬼さんは一番小さい女の子を抱っこして空中に浮かせました。女の子は空が飛べるようになって大喜びです。両腕を鳥の羽のように羽ばたかせて公園のまわりを一周しました。

軽蔑顔の大人達もこれにはびっくりしました。鬼さんをちよっぴり見なおしたようです。

「やあ、あんたは本物の手品師だな、これはすごいすなあ」

「おやおや、まだ信じてくれないのですね」

鬼さんはすっかりおもしろくなってきました。自分が恐れられていたころとは人間はすっかり変わってしまったのです。人間が持つていない力を見せてやろうとしました。

大人のひとりが好奇心いっぱいな様子で頼みました。

「じゃあ、私達もあの女の子のように飛べるようにしてください」

「いいとも！」

鬼さんは大きな手のひらをぐるんと輪をかいて振り回しました。

すると、

公園にいた鬼さんも大人達もこどももイヌもネコも、みんな、みんな、

空を飛べるようになったのです！

わあい、わあい！

人間は大人もこどもたちも大喜びしました。

わあい、わああい！

空が飛べる！

空を飛べるよ！

鬼さんも空を飛びながら山を案内しました。

実は空を飛ぶのも100年ぶりでした。人間に見つかるといけ

ないので飛べないふりをしていたのです。山の上を飛んでいると今更ながら人間の家が際限もなく増え、人間の数も増えているのがわかって驚きました。

やがて飛びつかれると、みんなを山のとっぺんにある自分の家に案内しました。そして山から採れた木の実や川魚をごちそうしました。

「おいしい、おいしい」

「おいしかりう、たくさん食べてくれやあ、」

鬼さんは冬のために大事に取っておいた食べ物まで出してごちそうしてやりました。

やがて人間達をふもとまで見送り家に帰ると、さすがに疲れしました。それでも心がほっこりあったまってぐっすり眠れたのです。

目覚めると布団の横で友達のかみなり鬼さんが厳しい顔でにらんでいました。

「おい、おまえ。人間と仲良くしていたな。わしは空の雲の上からちゃんと見ていたぞ。その上空まで飛ばそうなんて、なんてことしやがる」

「人間はわしらを怖がらなくなった。だから仲良くしよう、喜ばせてやろうと思ったんだが」

「もうこれきりにしたほうがいいぞ。神様に怒られるぞ」

かみなり鬼さんは忠告しましたがこっち山の鬼さんは首を振りしました。

そして毎日ふもとまでおりてこどもたちと鬼ごっこをして遊びました。

ある日いつものように遊んでいると大きな雲が公園に下りてきました。公園は霧に包まれたように真っ白になって何も見えなくなりました。鬼さんはこどもたちをこっちにおいでとかばいました。この雲はかみなり鬼さんの雲だとわかっていたからです。

「おつ、かみなり鬼さんだろう、遊びにきたのかやあ」

「いんや、違うよ。神様に見つかったんだ。おれはお前をこっち山

におかず雲の家に連れていくように言いつけられて迎えにきたんだ」
「行きたくないよう、ここでこもたちと遊びたいよう」

「じゃあ、神様にそう言えよ、まあ、この雲に乗れよ、とにかく神様のところへ行こう」

こつち山の鬼さんはかみなり鬼さんに連れられて神様のところへ行きました。

神様の雲は空の上の一番上の位置にあつて鬼さん達も来たことがありません。大きな門のとびらを開けて神様に会いました。

神様は白いひげをなでながら、こつち山の鬼さんに言いました。

「鬼さんだめだよ。人間を空に飛ばしただろう。人間には人間の能力がある。これはしてはいけないことだったんだよ」

鬼さんは素直にあやまりました。神様は言いました。

「そんなにヒマならここで働きなさい。することがたくさんあるから」

鬼さんは首をふりました。

「わしは人間のこもたちがかわいいのです。どうかこのままこつち山で暮らさせてください。もう人間を空に飛ばしたりはしませんから。許してください」

「鬼の姿のままでこもたちと遊ぶのかね？鬼と人間は違うよ。鬼はもう絶滅しかかっている人種だ。公園で人間と遊ぶくらいならここで働いてもう1回結婚しなさい。女の鬼を紹介してあげるから。こどもができたならそのこと遊べばいいだろう」

こつち山の鬼さんは前の奥さんが忘れられないので断りました。

神様は機嫌が悪くなりました。

「じゃあ、好きなようにしなさい。ただ鬼が人間と一緒にいるのは喜ばしくない。だから、そのツノとキバをここに置いていきなさい」

鬼さんは素直に大事なツノとキバを神様に渡しました。そのとたん鬼としての神通力がなくなりました。

こつち山の鬼さんはツノとキバがないとただ目と身体が大きいだけのおじいさんのようでした。人間を空に飛ばしたりできなくなりましたがこどもたちはそれでも鬼さんが大好きでした。鬼さんは毎日公園に行つてこどもたちを遊びました。

そのうちに塾やおけいこ事に通う子供が増えて、公園に来て誰も来ない日が続きました。鬼さんはまたさびしくなつてふもとにあるあちこちの公園を渡り歩きました。

「鬼さん、こちら、鬼さん、こちら、手の鳴る方へ！」

どこへ行つてもこんな歌ももう聞けません。

やがて、鬼さんはこつち山にまた戻ってきました。そして神様から鬼のツノとキバを返してもらい、天の雲の国へと引っ越しをしたのです。

その2 鬼のおまつり

ぼくの名前はいちろうです。ぼくのママは鬼です。でもそれは、変身した時のことで普段は人間とかわりません。パパは普通の人間です。だから、ぼくは鬼と人間のあいのこです。

ママが鬼だということがわかったのは、きのうのぼくの誕生日です。7歳になったというのでママはぼくに小さな箱をくれました。木で作られていいにおいがします。ヒノキという木のおいだそうです。喜んで開けてみるとその中にはツノとキバが入っていました。小さな赤い布に糸で結わえられていて何かの骨格標本のように見えました。

「鬼のツノ・キバ詰め合わせセットです。ご先祖様の形見だから大事にしなさいね」

「これ・・・どうやってつかうの？」

「普段は誰にも見つからないように押入れか机の奥に入れておきなさい」

「うん・・・」

「もうすぐ鬼のおまつりがあるからその時に使い方を教えてあげる。パパには内緒ですよ」

「うん、わかった」

ママはパパの前では普通の人間として暮らしているのです。ぼくも鬼の血が入っていたなんてびつくりしました。ママが鬼らしいところはちつともありません。

ぼくは押し入れにそれを放り込んだまま新しいゲームに熱中していました。そしてそのまま忘れてしまいました。

やがて鬼のおまつりに行くことになりました。招待状がきたそうです。パパは出張で留守でした。

「前にあげたツノとキバのセットを忘れずに持って行きましょう。」

おじいちゃんとおばあちゃんも、あんたに会えるのを楽しみにしているよ」

ぼくはお父さんの方のおじいちゃん、おばあちゃんしか知らなかったのの後二人いるなんてびっくりしました。

鬼のお祭りは車で30分くらいのところにありました。縁日の屋台がいっぱいでいてにぎやかでした。ぼくの友達も来ていて立ち話もしました。

「ねえママ、これって普通の人間のおまつりじゃん・・・、鬼のおまつりといっても人間がするおまつりだろう」

「いいえ、それは見かけだけ。本当の鬼祭りもあるのよ」

ママはぼくの手をひいて神社の神殿の奥に連れて行きました。もちろんここにくるのははじめてです。きょうはこの地方の住民を苦しめた鬼を退治した記念の日だそうです。鬼退治の記念日が鬼のおまつりだって。んん・・・？なのに、どうして鬼が神社の奥にいるのだろうか。神殿には案内の人は誰もいないのにママはずんずん奥へすすむ。どんづまりの部屋までいくともう屋台のにぎわいや人のざわめきも聞こえなくなっていました。

ママはバッグから鬼のツノとキバをつけました。するとずいぶんと鬼らしくなりました。いつもの普段着のままのブラウスとスカート姿の鬼です。

「さあ、あんたもママのまねをしなさい」

だから、ぼくもママのまねをした。ツノを取り出して頭につけるとくつついた。キバも歯につけるとぴたりとくつついた。それらは吸いついたまま取れなくなった。

「ママ、取れないよう」

「それでいいのです。すぐに取れるようなツノとキバのセットなんか安物です」

ぼくたちはこの格好で部屋の奥に行きました。部屋にはすでに何

人かいましたがみんな鬼のツノとキバをつけていました。でもそれ
がなければ普通の人間と変わりません。

「こんにちは、おや、今年は子どもさんを連れてきたのかね」

「はい、このこととしては初めてのお参りです」

「やあやあぼうや。そのツノとキバ、すてきだね。よく似合うよ」

おじちゃん鬼がぼくのツノをなでてくれた。ぼくのつのはママと
同じ2本だがそのおじちゃんは1本だけでもぼくのよりずっと大
きいツノだった。ぼくは何と言ってよいかわからないので黙ってい
ました。

床の間には本物の鬼が2人座っていました。絵本の挿し絵でよく
見かけるとおりの鬼だった。真つ赤な大きな顔にもじやもじやの髪、
大きなツノ、大きなキバ……。それがぼくのおじいさん鬼とおばあ
さん鬼だった。ママはぼくを床の間に上らせてその鬼達に丁寧
にあいさつさせた。

「こんにちは、おじいちゃん。おばあちゃん。おひさしぶりです。

この子がわたしのこどもでいちろうといます。どうぞよろしくお
願いします」

「おお、おまえがいちろうか。よくきたな。わしらはおまえのおじ
いちゃんとおばあちゃんだよ。鬼のしるしを身につけるまでに大き
くなったか。よかったなあ。いい子になったなあ」

鬼達はぼくを見てにこにこ笑いぼくの頭を何度もなでてくれた。

「さあ、今日はお供えをいただいたし、おいしいものをたんとおあ
がり」

ぼくはママや他の鬼達と一緒においしいものをたくさん食べた。
それから神社の巫女さんの踊りと祝詞を聞いた。

やがておじいさん鬼とおばあさん鬼が床の間からおりて部屋を出
た。ぼくたちはそろそろあとをついて行った。神社の奥の庭のちい
さなおやしろの前に出る。その前にたままおじいさん鬼とおばあ
さん鬼は小さく身体を丸めた。すると光る玉になっておやしろの中

へすうつと消えていった。その瞬間巫女さんが嚴重に鍵をかけた。ママや他の鬼達はさみしそうな顔をして見送った。ぼくのツノとキバは鍵をかけられた瞬間にぼろりと取れてしまった。ママのツノとキバもそうだ。他の鬼達もそうだった。

ママは丁寧なツノとキバを箱にしまいながら言った。

「今度会えるのは7年後です。それまでいい子にしようね」

ママは家に帰るところ話してくれた。

「昔話の鬼退治で、鬼は人間に負けました。それからは子孫の私達も人間のふりをしなければならぬのです」

「鬼のツノとキバは鬼の証明になるので一生、大事に持っているのですよ・・・」

「それは7年に1回のお祭りにしか役に立たないけど、病気になったらこのツノを少し削って飲めば人間のように病院に行かなくてもなおります。それから・・・この話はパパやお友達の誰にも話してはいけませんよ」

ぼくはママに質問しました。

「ねえ、ママ。もし秘密をばらしたらどうなるの」

「誰も信じませんよ、鬼の存在すら信じてもらえないでしょう」

「・・・鬼っていいものかな？普通の人間とどう違うのかな」

「違いなんかないけれど、人間だっているんな人種がいるでしょう。私達は絶滅しかかっている動物と一緒にです。ツノとキバのセットももうありません。みんなこわされたり、なくしたりしたからね」

ぼくは箱をしっかりと持った。そしてこのセットを大事にしようと思いました。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9929o/>

鬼 2 題

2010年11月20日17時25分発行